

**授業概要**

本講義では、日本語文法の歴史的変遷を扱う。

前半では、日本語の活用・格・準体句・係り結びといった文法項目の体系が、いつ・なぜ・どのように変化したか、さらに、これらの変化の相互関係について講義する。例えば、上一段活用の「起きる」という動詞はかつて、上二段活用の「起く」であったが、いつ・なぜ・どのようにして今の形になったのだろうか？

後半では、前半の内容も踏まえつつ、そもそも、言語の変化というものがなぜ、どのように起こり、変化にはどのような傾向・パターンがあるか？ということを考えていく。

**授業計画**

第1回	ガイダンス
第2回	古典文法の基礎知識
第3回	活用の変遷①
第4回	活用の変遷②
第5回	格体系の変遷①
第6回	格体系の変遷②
第7回	係り結びと準体句①
第8回	係り結びと準体句②
第9回	言語変化の要因① そもそも変化とは何か、なぜ変化が起こるか
第10回	言語変化の要因②
第11回	言語変化の要因③
第12回	言語変化の傾向と類型① 変化にはどのような傾向があり、その傾向はなぜあるのか
第13回	言語変化の傾向と類型②
第14回	言語変化の傾向と類型③
第15回	講義のまとめ
第16回	試験（筆記試験による）

**到達目標**

- 現代の自分達が使っている日本語の（特に文法の）あり方が、どのような変化過程の産物によるものかを学ぶことにより、日本語についてのより深い理解を得る。

**履修上の注意**

- 前期の「日本語学（概論）」と併せて受講することを勧める。
- 資料には現代語訳を付すよう努めるが、やはり、読めるに越したことはない。よって、古典文法の知識を一通り復習しておいてほしい。

**予習復習**

- 小テストを数回行う。小テストはそのまま期末試験に出るので、復習を怠らないこと。

**評価方法**

- 講義中のコメントシート 25% ・小テスト・課題の提出等 25% ・期末試験（筆記試験）50%
- 期末試験の受験には3分の2以上の出席が義務付けられているが、試験は全 15 回の内容が前提となるため、全 15 回、休まず出席すること。遅刻は 2 回で 1 回分の欠席として扱う。

**テキスト**

- 講義中に資料を配布するため、テキストの購入は不要。
- 資料をまとめるためのファイル・ノート等を一冊用意すること。
- 古語辞典（電子辞書可）や、高校生の頃に使った古典の教科書・参考書などがあれば持ってくること。